



俳諧埋木 全

伊地知文庫
文庫20
336



文庫20
386

伊地知氏書冊

誦諧埋木目錄

季吟撰

誦諧之事

六義

發句之切字

本哥之發句

撰弟三付西八勺名號之意

祝云及想之年之心得

手余於家



本不可不謂之詭諧

皮肉骨之詭諧

去草行乃又以此

有又乃乃作其文の句作

二五三四又二四三

親の疎の

の毎序歎也流

中身



詭諧と云ふ事。奥義抄云。漢書に詭諧者
滑稽也。滑稽、好也。勢詞不盡也。史記滑稽
傳考物云。滑稽、内定也。云。出。成。事。用
不窮。竭。若。滑稽、吐酒也。

傳云

大史公曰。天道恢恢。豈不大哉。談言微中。亦
可以解紛。優孟、多奇。常以笑調諷。優
旃、吾知。笑之。然合於大道。淳于髡、滑稽。多
事。郭舍人、發言陳辭。雖不合大道。然合人
之和悅。 是皆滑稽者也。

これにて定まらば此の歌讀のやうにたゞとて
まゝにそとにまゐらるや。ねえの偏りたうとて
よらうや。ねえとてつる荒よとて火とて水
とまけてつるあつちのやう

飛鳥井殿の古今集の洗よの詠傳とて世に
いれまゝのやうに詞のよとてつるあつちのやう
更よとてつるあつちのやうにねえとてつるあつちの
つるあつちのやうにねえとてつるあつちのやう
とまけてつるあつちのやう

宗祇云詠の浦尾切傳胡各切和也合也

いさゝかの事此傳の依を物とつるあつちのやう
人のあつちのやうとつるあつちのやう
とて當傳は不用と。當傳のいづれ道とて道此
伝道意のつるあつちのやう。史記・傳傳
傳とてつるあつちのやう

愚案よい祇傳のいづれはとてつるあつちのやう
とつるあつちのやうにねえとてつるあつちのやう
洗のいづれとつるあつちのやうにねえとてつるあつちの
とつるあつちのやうにねえとてつるあつちのやう
とつるあつちのやうにねえとてつるあつちのやう
とつるあつちのやうにねえとてつるあつちのやう

仁云風化風刺皆謂發喻不行也也七葉
同書云風の調也也七葉也七葉也七葉也
わつふいさびて義とささるる也七葉
風とさくさく云。宗祇古今乃抄云毛の
乃六葉よの持て義ありて。或経緯と云。
或の祈用と云のささるる也七葉也
具と云とあり。七葉と云。七葉と云。七葉
又義通と云の流もありと云。七葉と云。七葉
傍如と云の事なりと云。七葉と云。七葉
外郭と云。七葉と云。七葉と云。七葉

ま。痛揚しきりぬへし。揚よそへて。乃乃心
とあり。七葉と云。乃乃心なり。七葉と云。七葉
半松。東宗邦と云。乃乃心。乃乃心。乃乃心
義也。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心
ら。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心

よめな。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心
思のの中にして。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心
七葉と云。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心
乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心。乃乃心

長律比とのさあひと記しんて今あつて
ゆりりや能備よ

ゆりりや能備よ
くひとの和年と神や月日星 季吟

田 貞

貞 念云貞いあつて年也念古今よ
きん奇よ月一やられん中一いあつて
とらとり蓮の足殿の字ましくいあ
いん奇よとこ一からやあつていあ
かたはあつてあつてやがあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつて

きあつてあつてあつてあつてあつて
とらとり蓮の足殿の字ましくいあ
いん奇よとこ一からやあつていあ
かたはあつてあつてやがあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて
とらとり蓮の足殿の字ましくいあ
いん奇よとこ一からやあつていあ
かたはあつてあつてやがあつてあ
あつてあつてあつてあつてあつて

清浦云正長云見今之長端於媚諛取

備あり

かり孫杜周朱のこころありぬ 長流

とてあつてこころありぬ侍が 季吟

あきくやびくくひあきく

五雅 八雲よ云雅いふこと奇しとまり古し

もいとわがくのりくくくくくくくくく

云雅いふあきくくくくくくくくくく

きく一編よ始よあきくくくくくくく

雅よ二のありくくくく言雅二よ意雅あり

云雅いふくくくくくくくくくくくく

事とくくくくくくくくくくくく

いふくくくくくくくくくくくく

活定とくくくくくくくくくくくく

ゆ。きくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

ゆくくくくくくくくくくくく

ゆくくくくくくくくくくくく

云言天下とく事形四方之風謂く雅雅正

也。政有小大故も小雅要有大雅要今案

雅いまもくもききくもあはれもきりく
たしくもきくもあはれもきりくも
宗祇云雅い城よ何りくもあはれも
政の吉悪どかきりくも雅い政もきりく
ありありふくも公教僧が雅い門のよもあはれも
花の秋よい成よきりくもきりくもあはれも
もきりくもあはれもきりくもあはれも
るやきりくもあはれも宗祇のあはれもきりくも
よもあはれもきりくもあはれもきりくも
あはれもきりくもあはれもきりくもあはれも

とくもあはれも

風風もいもあはれもきりくもあはれも 長治丸

もあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも 玉奈 季冷

六頭

て神よきりくもあはれもきりくもあはれも
くもあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも
いもあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも
もあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも
りもあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも
きりくもあはれもきりくもあはれもきりくもあはれも
詩

序よ云英威徳之形容其成而告神
といり乞い六律乃中の頌の亦乃文なり
法補云正長云頌云補也害也今之法廣
以英之今業も頌の補也稱頌之義也後人の
いひる也故も頌といふこと云云亦抵云
頌の害也補也害の王者乃威徳とがことわ
りしていひる也補いこといひることわ
りしていひる也頌の詩の宗廟にて補して神
まつ事也世にみく神よいふことわ
りし事也いふことわ 心敬信邦乃伝り 花枝

みく事也いふことわいふことわいふことわ
いふことわいふことわいふことわいふことわ
序乃少後も頌の詩よ神祇の心ま
との事いふ少後い後よあらん乃書入る詞也
空の事いふことわいふことわいふことわ
難と作者は傳りて法同中記といふことわ
いふことわいふことわいふことわいふことわ
これ大宇無いことわいふことわいふことわ
神乃いふことわいふことわいふことわいふことわ
といふことわいふことわいふことわいふことわ

法師の従ふしやしつゝやゆんそと俳諧
そと宗邦の頌乃白ぬもよきうひゆ

伝あまたたれとて梅のきくかき院

冥加われお君よあやめと少なりを 季吟

長野丸六義乃口傳よ云風の巻とあふん

まく物とつりていふよふまはらうてま也

出たのどとつりてまなよあふんこもよ也

つりや真の物とつりてまなよあふんこもよ也

とどあつりこ也是風出真乃のきよ

ゆくつりつゝあふんもや又城雅乃ふ

つりつ城の物とつりてまなよあふんこもよ也
雅のつりつゝあふんもや又城雅乃ふ
頌のつりつゝあふんもや又城雅乃ふ
六義乃中よ雅と執らるまあり。心は
道とたつりつゝあふんもや又城雅乃ふ
ふん也。畢竟は義と肝心と流のふん。
宗邦云花は葉とつりてまなよあふんこもよ也
釈。まはらうのつりつゝあふんもや又城雅乃ふ
つりつ。平と録。花のつりつゝあふんこもよ也
雅頌乃六義とつりて六道場廻り

ひととにきくまう

別業は能借と放言よ粗玄結語あり
とてし戯言らねとてふより出づわこ
かろふれとていふはなほとてんらんらん
ひに口よまふとてんはなほとてん
とてんはなほとてんはなほとてん
とてんはなほとてんはなほとてん

殺白の切字

あふ
うらくをばりてしは年らん

あふ
ニまよとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

あふ
あふとてんはなほとてん

二葉切
〜の〜何〜の〜毒乃花

〜の〜力〜の〜

〜の〜切字〜

〜の〜切字〜

〜の〜切字〜

〜の〜切字〜

〜の〜切字〜

下ら付のまゝう懐紙うらりすうらるる
うけりきとらまふやうなる

愚案は右まき舟なるしむく祖文家持
は法眼よけのくゆ抄物よきうされ
家おもしこらねんくたのり孫くゆせ。
故本丸祖傳よいうら物さても楊
流すす。こわいとこわいもくもく
まのまはちこいひくちこいひくち
てこのこくゆりあうまのこわい
そのこくひくちあきと未傳乃清也

連傳よまきりあてまよとら何乃作
はこわいぬのこわいもくもく
まのまはちこいひくちこいひくち
らこいひくちこいひくちこいひくち
まのまはちこいひくちこいひくち
まのまはちこいひくちこいひくち
紹巴法眼よ愛お抄紙尺教懐四な
十三句めよふゆあり
愚案よこれ口傳するわらう

後記
△下白乃てしむるなり

△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり

大さうぶまどくもく
きしちうくと長み丸ちとらひきまもく

口借あり

△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり
△下白乃てしむるなり

くら杜のふらふらとく神を
くらふらとく神を
是とくふらふらとく神を

見多し神は海にゆん
ゆらゆらとく神を

はせとくふらふらとく神を
らふらふらとく神を

連年

はせとくふらふらとく神を

書くふらふらとく神を

とく

とくふらふらとく神を

とくふらふらとく神を

とくふらふらとく神を

とくふらふらとく神を

とくふらふらとく神を

桐乃とくふらふらとく神を

きゆのふらふらとく神を

あつとくふらふらとく神を

あつらひあつらひてけつる白雲らんき歌
引よとよとらん能作

久しにわらわのまじしるの火

古今集とわたり後撰よき歌そのめ

久しにわらわのまじしるの火

まよふまよふまよふまよふまよふまよふ

地又人よあまそめしるまよふまよふ

かろしやとくく八字の針糸とく

まずあり

久しにわらわのまじしるの火

思ふにわらわのまじしるの火

うらみとらわのまじしるの火

△すまろてませし

のひあつらひのまじしるの火

とんまわりのまじしるの火

くろくまのまじしるの火

うらみとらわのまじしるの火

ふまろあつらひのまじしるの火

くろくまのまじしるの火

くよしくと思ひ出らねど、あつたつたそ
ろ。乃ちこれれとん人々あつたつと
ゆゑをよむひらすすくす

【本行】こころの徳

まうりうらや大見寺殿

徳乃事とて足よろしく

念乃々やわとんくわい

物育てちれ事と物ほく

【皮肉骨乃徳

皮 為り念りくわとん

肉

本膳といとそさうちりたこと

普賢乃前よゆうが寺

くわその念いさくわく

くわしくとくわく

まんせしとくわく

【真草行】徳

真

又字教多くくわく

くわくらの念いさく

くわくやる物具乃と

草

あつたつたくわく

行

たれきよらる月乃くく
ふとは月乃りりらよぬら
宗頼云ん行けあららと
中とせらと宗とらひあ
と行とのや

△有文乃白他文乃白作りや

よめく月と積や
気有文也く月と積や
月とあめく積や
気有文也く月と積や

下乃白よ二五三
きすいあらく

二五三
久日乃れは
山乃らるる
五二四

うそくくわよ
映くこの乃
松乃能く
らそくく

これやせを登よおつらたきま
りまのまの光乃うらのま乃色
兼白乃姿いしとてとて只ひとよ
ふましくけつらせと乃をうり能信
版らりやひろきおとせたくして
いぬすもごんぬらりてまけぬら
哥よの律白よ秀奇ゆりしと定安
ゆまろとらん能信の先身らくと
とてつらとこまれたや律白の律
ゆとつらとつらとらんすらとらや

△歌よ篇序題曲流と云すあらと連
みとあらしとてん敬信部云能令下乃
白よ曲乃んわらととらと篇序題は
てと能信とて又上乃白よ曲乃んわらと
とてとらとと篇序題よとらとらと
とらんむいさ

おつららしてさくこまゆけ
物くらんこよいあつら月いあま
とらとらとらとらとらとらとら
とらんまのつらとらとらとらとらと

はる茶乃下れは曲乃ありてよひの
ふゆよ付ると篇序はよきよき
ひる茶乃よゆりかゝる也

さうきさねたうかはぬよか
人くひぬたかゝいさき

ふい下きさう人よや成ぬらん
とさうさういりらよいさうさ

は二句の茶乃よ曲乃ありてよひあり
たふ故よ下乃ゆは篇序はよきよ
茶乃のさうきさうきさうさうさ

傍如ま歌いさ守と乃のさうのさうて
下乃のよゆりり下乃のさうのさうて
と乃のよゆりり下乃のさうのさうて
各よゆりりさうのさうのさうて
さうさうのさうのさう

愚案よ篇序は曲流いさ乃のさうの
作りさうさうさうのさうのさうの
いささうさうさうのさうのさうの
尸次まよはゆりりさうのさうのさうの
さうのさうのさうのさうのさうの

七ヶ外やむとふたまふりし
佛乃目とくく一かと念乃世長
物表体

ゆいりらるる世ん心ゆり
法いりらるる世ん心ゆり
ふの体

心とけ骨がわ色よ逢りせく 富将監
理世体
定家公の理世世長は心ゆりかたの異域の重
舞音の長表天曆の異と月時聖代乃
し

あまの系うつやねなれ
若しや法乃しとくよとくん

世長体
茶とくありとく人うとくぬ

揚板とくう所乃乃供として 法下書
玉抱体
定家公の系一くすわらんと合てりゆかめ
うり直よりきるすてとくく西ゆきふやて
候かめめきせとん 難くやてい

祇く人うとくくしとく
あまのうもれおふ足香一や 長流
中田藤体
七ヶ外やむとふたまふりし

あつふふ家ぬきも持つて

二の木の枝の本陰よ氷あつて 素直体

存直体

まじくもはまもさの白さ

雪乃よまありやとたて持つて 素直体

花麻体

日本乃もめ口乃ひらき

大磨どこうよまてやのめいん 素直体

若く代つてなまど付く 素直体

素体

まじくもはまもさの白さ

うきうきこれい何とて

能乃よ名のうらわとや打たれ 素直体

竹体

まじくもはまもさの白さ

やせうらうとてと出と素直

あんなうらうとてと出と素直 素直体

才五度下竹体

くひあつらそまこれ出

朝とりの雨つらや乃よ分れ 素直体

秀逸体

いっくらもあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

写古侘

あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

中六面白侘

佛よあつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた

一真侘

あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

系曲侘

あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

あつた世もあつた世もあつた

中七濃侘

あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた
あつた世もあつた世もあつた

てあつるものやとて筆をうけり
もたす

丙申睦月初五日重校合之 季吟

同五月十四日謹写 〇身元隣

延寶元癸丑年仲冬吉日

寺町二条上町

開板

